

あ　と　が　き

本書は、東洋文庫近代中国研究班が2014年から取り組んできた共同研究プロジェクト「戦前・戦中期日本の華中・華南調査」*の成果である。本共同研究には、以下の研究員（兼任研究員を含む）が参加した。

・政治的分野

本庄比佐子（東洋文庫専任研究員）、田中比呂志（東京学芸大学教育学研究科教授）、松重充浩（日本大学文理学部教授）、山本真（筑波大学人文社会系准教授）

・経済的分野

久保亨（信州大学人文学部特任教授）、金丸裕一（立命館大学経済学部教授）、富澤芳亜（島根大学学術研究院教育学系教授）、吉澤誠一郎（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

・社会的分野

内山雅生（宇都宮大学名誉教授）、弁納才一（金沢大学経済学経営学系教授）、高田幸男（明治大学文学部教授）、吉田建一郎（大阪経済大学経済学部准教授）

・文化的分野

瀧下彩子（東洋文庫専任研究員）、浅田進史（駒澤大学経済学部教授）、佐藤仁史（一橋大学社会学研究科教授）

序章にも述べられているように、近代中国研究班では、20世紀前半に日本が中国とその周辺地域について分析した資料に関し、日本および中国の図書館や研究機関における調査を進め、その実態を明らかにしてきた。これらの成果を基礎とし、2015年からは科学研究費補助金「戦前・戦中期における華中・華南調査と日本の中国認識」（基盤研究（B）、2015～2019年度、15,990千円）を得て、18回の研究会（レジュメの公開によるオンライン開催を含む）を開催し、研究員以外の国内外の研究者も何度か招聘して知見を求め、華中・華南地域に関する調査活動資料の基礎的な整理を行ってきた。

そうした蓄積を踏まえ、2020年3月4日にはシンポジウム「戦前日本の華

中・華南調査〕を開催することも予定し、準備を進めていた。しかし、このシンポジウムについては、残念ながら新型コロナウイルスの感染急拡大のために延期を余儀なくされ、結局、2020年6月にネット上で開催し、希望者にレジュメ集を配信するにとどまっている。今回の共同研究に関し、多くの研究者の方と直接、議論を交わせる日が一日も早くやってくることを期待したい。

華中・華南地域は長い歴史的伝統を有する一方で、清末以来、欧米列強の経済進出や日本の軍事的侵攻などの影響により、急速な近代化の波を蒙ってきた地域である。いわば伝統と近代という一見相対する二つの要素が対立と共存を繰り返すという複雑な特徴を有し、中国史研究者の注目を集めている。本地域に対する日本の調査活動は、膨大な文献と資料が残存するにもかかわらず、これまでは個別分散的な研究にとどまる傾向にあった。本書は、これらの調査資料を各論のテーマに基づいて整理し、華中・華南地域に対する日本の調査や関心のあり方について、系統的な分析を試みたものである。

研究成果の結実にあたっては、多くの方のご協力をいただいた。日本の華中・華南調査に関する貴重なご意見をいただいた、李培徳氏（香港大学研究員）、陳慈玉氏（中央研究院近代史研究所研究員）、鍾淑敏氏（中央研究院台湾史研究所研究員）、檜山幸夫氏（中京大学社会科学研究所特任研究員）に謝意を表したい。

*プロジェクト名は、時期により若干の変化があった。

2021年1月

瀧下彩子